

## コラム ～子ども支援委員会 委員から～

自分と他人のこと

委員 中嶋 慎治

友達付き合いが上手くいなくて悩むことはありますか？

グループの中で、気が合わない人がいる、自分だけ浮いているとか、もしかしたら、いじめられているという人もいるかもしれません。

それだったら、そんな付き合いはやめればいい、言葉でいうのは簡単ですが、実際は難しいですよ。ひとりぼっちになるのは嫌ですし、もともとは仲の良かった友達かもしれません。

他人との関係は、難しい。それは、自分と相手は違う人間だし、自分と同じように、相手にも気持ちがあるから。気の合う、合わないもありますね。グループだと、誰かをターゲットにして、他の人が結束しやすいという人間の心理もあるでしょう。

他人と自分。相手がどう考えているか気になり出すと、すごく気になる。責められたり、ひどいことを言われたときは、自分は駄目な人間じゃないかと自信を失ってしまいます。

ところで、学校で習ったかもしれませんが、現在の国や社会は、近代の人権思想という考え方で成り立っています。それは、人は皆、生まれながらにして人権を有するという。誰もが、人であるというだけで最大の価値がある。だから、誰もが、同じように尊重されるということです。そのことは、憲法第13条にも、「すべて国民は、個人として尊重される。」と書かれています。

尊重されるのは、国でも、社会でも、学校でも、グループでもなく、ひとりひとりの人、個人です。その個人が、その人らしくあること、つまり、自由であることが最も大事なことでされています。やりたいことをやり、食べたいものを食べ、着たい服を着て、行きたいところへ行く。どんな仕事をするかも、スマホでどんな情報を発信するかも、どんな神様を信じるかも自由です。他人に迷惑をかけない限り、何をしてもいいし、しなくてもいい。

それは、私はこうありたいんだという、あなたらしさを追求することに価値があるということです。それは同時に、他人らしさも認めるということです。

友達付き合いの判断も、あなた自身がどう感じるか、どうしたいかが一番大事だと思います。その相手との関係やグループの中で、あなたがあなたらしくいられるかどうか。

「私らしさなんてない」、「どうせ、自分なんて・・・」と感じる人でも、心の奥で感じる好き嫌いの気持ちがあると思います。それを大事にしてほしいです。

グループから離れることで、仲の良い友達とも離れることになるかもしれない。悩ましい問題ですね。でも、無理をして、辛い思いをし続けるような付き合いは、あなたにとって良いことなのかどうか。

1人きりになって寂しい、どうしたらいいか分からないというようなとき、子ども支援センターに相談してみてください。スタッフがあなたの話を聴いて、一緒に悩んでくれると思います。それが、良い方向へ向かうきっかけになるかもしれません。

## 伝えたいこと

委員 鎌 妙子

子ども達は、多かれ少なかれ胸の中に悩みというか、心配ごと、不安なことを抱えながら家庭で、学校で、社会の中で暮らしていると思います。

子ども達の電話から聞えてきます。

「意地悪された…」 「友達に謝りたい…」 「学校に足が向かない…」

言葉にできないけれど、苦しい、悲しい思い、胸の中に溜まっています。

つらいこと、困ったこと、またうれしいことも、子ども達は誰かに聞いてほしいと思っています。

もちろん、お母さん、お父さん、家族に、そして先生に聞いてほしい、

でも、大人たちは忙しい時が多いんです。子どもは、そんな気持ちをすぐに話したい、伝えたいと思っています。

そんな時はいつでも、電話の向こうだけでも寄り添ってくれる人がいる、一緒に悩んで考えてくれる人がいます。

社会環境の大きな変化の中で、大人の気づかないところで子どもの人権が脅かされていることが危惧されます。そのことに子ども自身も気が付かないことが多いでしょう。

「嫌なことは、声をあげていいんです」

「誰かの助けをかりていいんです」

子ども達を見守り、子ども達が安心して生活できる社会であること、そして子ども達自身がそうした力を付けていくことができるように、力をかすことは大人の役割です。

私達は、子ども達が安心して話してみようと思える、信頼できると思えるような大人でありたいと願っています。

話してみてください、私達は子ども達の声に耳を傾け続けています。

日本が1994年に批准した、子どもの権利条約には、「子どもの最善の利益を第一に優先する」とあります。

子どもの最善の利益は、「子どもにとっての最善の利益」であることを、大人たちは忘れがちでもあります。

子ども達も一緒に考えてみてください。

自分にとって大切なものは？ みんなにとっても大切なものは？

大切なものは、自分で守っていく力を付けることが必要です。

子ども達が担っていく未来が明るく幸せな社会であるよう、私達は大人の責任と役割を果たしていきたいと思っています。

## 『子どもから生き方を学ぶ』

委員 佐々木 尚子

小学校3年生の愛菜さん（仮名）は、妊娠中のお母さんと、再婚相手のお継父さん、異父弟妹達と暮らしていました。「尚子先生、愛菜のこと好き？」何度も確かめてくる人懐っこい子で、話の多くは「愛菜だけが怒られて、かわいがってもらえない」こと、弟や妹達がいてお母さんに近づけないこと等で、狭いアパートの一室では家族全員が眠ることはできず、愛菜さんだけが「隣の部屋で、一人で眠るの」とも話してくれました。

「だから愛菜、いつも寂しくて」（そんな時はどうするの？）「うんとね、お皿を洗ったり洗濯物をたたんだり、妹のオムツも替えたりね。いっぱいお手伝いをするの。いっぱい褒めてもらえるように。だけどどうしてもギョってしてもらえないの。」

まだ幼い子特有の甘い匂いが漂う愛菜さんが、お母さんに抱きしめてほしい、一緒に眠りたい、そんなただ当たり前のことをしてもらうことが、どうしてこんなにも遠い道のりなのだろう…。あどけない表情、カサカサの細い指を目の前にして、（そっか）に続く言葉が浮かばなかったことを覚えています。

私だけでなく学校の先生方も、福祉の職員もなんとかこの状況を打破できないかと、何度も両親を含めた話し合いがもたれました。でも、お母さん、お継父さん、家族の誰もが限界ギリギリの生活で、次の手立てがないままだった、ある時のことです。

「このままじゃダメになっちゃう。あのね、愛菜だけお引越すことにしたよ」自分に言い聞かせるように話してくれた、愛菜さんのその言葉には、静かだけど強い決意がありました。それは養護施設に入ることであり、同時に学校を転校すること、愛菜さんが誰よりも大好きなお母さんとの別離を意味しています。

私たちが感傷的に憂いている間、愛菜さんは、願っても叶わない思いと向き合いながら、何度落胆してきたことだろう。叫びそうになるような寂しい夜を、一体いくつ重ねてきたのだろう。本当に大好きなお母さんではあるけれど、今自分から手放さなければ、もっと大切な何かを失ってしまう。時間をかけて考える中で、愛菜さん自身がそれに気づいたことが伝わってきました。

小さな愛菜さんの大きな重い決断に、生きていくことは、こんなにも切なくて酷なことなのだ、と目を覚まさせられました。また、こんなに小さくとも、進む道は自分でみつけ出せるのだ、とも。時に、その決断は手放しのハッピーエンドではないこともあります。子どもにそんな苦しい結論を出させるべきでない、という考えもあるかもしれませんが。だけど大切なことほど、何が絶対に正しいのかなど、誰にも本当はわからないのです。ただ、今、決断しなければならぬ時というのが必ずあって、愛菜さんにとっては、それがまさに9歳のこの時だったのだと、私は理解しました。

だったら、私にできることはただひとつ。（よく決断したね）と愛菜さんが必死で見つけた、その生き方を認めることでした。「尚子先生、愛菜のこと忘れないでね」振り返り振り返り、最後まで別れを惜しみながら転校して、それきり。もう何年も経ってしまったけれど、あの時の愛菜さんの覚悟は、今もこんなにも深く私の心の中に刻まれています。

いま、ここに目を留めてくれたあなたへ

委員 野見山 ナオミ

今、あなたは、どんなことを思いながらここに目を留めてくれたのでしょうか？

私たち子ども支援センター、子ども支援委員会は、何かあなたの力になりたいと願い、“ああしたらいいかな？”、“こうしたらどうだろう？”と模索しながらこの1年も過ごしてきました。

ですが、振り返ってみて、私たちは、「課題解決に向けて本当に力になることができているのだろうか？」「安心して相談できる場所として機能しているのだろうか？」「実は、自己満足になってはいないか？」等々自問自答しています。

私たち大人は、「困っていること、悩んでいることがあったら、是非相談してね」とよく言ってしまう。でも、本当に困っている時に声をあげることは、色々な気持ちが入り交ざって、実はとてもとても難しく、喉元まで言葉が出てきても、声を出すこと、言葉にすることはすごく大変なことですね。

ちょっとやさそとの勇気ではないですね。

だから、伝えてくれたあなたには、「勇気を振り絞って話してくれて、伝えてくれて、本当にどうもありがとう」の言葉をお返ししたいです。本当に、ありがとう。

そして、もし、話してみようか迷っている人がいたら、「誰かに話すということは120%以上の勇気がいることだけど、一人で頑張らずに、私たちに一緒に考えさせてください」ということをお願いしたいです。

でも、そんなことを言っている私自身は、私が5歳の時に父がガンで他界したため母子家庭で育ち、二人姉妹の長女ということも手伝ってか、「私がしっかりしなくちゃ」という気持ちがいつも心の根っこにあって、子どもの頃は、なかなか誰かに相談することができない子どもでした。でも、正直一人で抱えていることはやっぱりしんどかったです。

経済的な理由から大学進学を諦めなくてはならないような状況になったときに、「私は大丈夫」と平気な顔を装いながらも、心の中はちょっと自暴自棄になって気持ちがささくれだったりしたことがありました。よく覚えてはいないのですが、それで多分、担任に「進学したい」ということを相談したのだらうと思います。（想像ですが、）それで担任の先生が、私が進学できるように様々に動いてくれて、そのお陰で進学できたのだと思います。奨学金の返済は大変だったけど、あの時に「進学したい」と相談できたからこそ、その後の道が開かれたのだらうと、今、改めて思い返しています。

とても勇気がいるけれど、メールでも電話でもいいので、どうか話してください。一人で頑張らないで、一緒に考えさせてください。あなたが笑顔で幸せな人生を歩めることを願っています。

今、子どものあなたへ

特別委員 山本 京子

Kさん、お元気ですか。

桜の花の時期も過ぎ、新緑の季節を迎えましたね。風薫る青葉、若葉に包まれて、信州の美しさがあふれる季節です。

新学期が始まって早や1か月、新しいクラスでの生活はいかがですか。

友達はできましたか。

部活は何を選んだのでしたっけ。

勉強はどうですか。そろそろ中間試験とかあるのですか。

「あれやこれやと聞かないでくれない、もう、うるさいんだから」と言いそうな、あなたの顔が目には浮かびます。

でもね・・・あなたが学校生活楽しんでくれていればいいなって、いつも思うんですよ。

私が、こんな心配してるっておかしいね。

Y

Yさん、心配してくれてありがとう。

本当はユウウツなんですよ。青葉じゃなくてブルー・ブルー・ブルーマンディ。

4月には明るかったクラスも部活も、この頃重い。教科書も重たい。ああ面倒、一日寝てたい。夜になるといろいろ考えちゃって眠れない、朝になると眠い。

友達のこととか、世の中のこととか、進路のこととか、家族のこととか考えちゃうこといろいろあって、自分が大人になったらどんな世界になるかって思うのに、なんで今の大人は平気で生活できるんだろうって思うんだよね。

親に言えば「どうしたの？何かあったの？いじめられた？」とかって言われそう。

だから、ここだけの話。いつもニコニコ、フツウにしていますよ。

K

Kさん、お返事ありがとう。

考えるよね、悩むよね、こんなことしていいのかな。他にもっと大事なことがあるんじゃないのかなって。でも深刻そうな顔すると、周りから「エッ？」って言われそうだし、「ベツに何にも」、「困ってることなんかありませんよ」ってポーズ取ってる。我慢。我慢。ガマン。見ない、言わない、聞かない・・・。

どこかで本音を出せるといいね。心配なことや嫌なことをポツポツ、ボソボソ話せるといいね。温かく静かに聞いてくれるひとがいるといいね。

Y

昔、子どもだったわたしから